

今日の日本 明日の世界



Vol.19
仮想通貨って
何が革新的なのか

1. 1万円札って何

ビットコインに代表される仮想通貨については、皆さんの中でも何となく分かったような、分からないようなもやもや感があるのではないのでしょうか。そこで今回は、分かり易くモットーに説明をスタートします。

1万円札って何でしょう、と言われると改めて考えてしまいます。私は学生に1万円札（日本銀行券）は皆さんが日銀に1万円分を貸し付けている見返りに預かっている日銀の借付書だ

と教えています。そうなのです。お札を持つている人は皆さん日銀に貸し付けを行っているのです。

普通は貸し付けを行った相手から利子を取ります。それはお金を貸してあげる手間賃です。更に相手の経済状態によっては貸したものを返してもらえないリスクも発生するので、そのリスクの度合いによって金利はリスクリーな人には高くなります。サラリーマン金融の金利が高くなる理屈です。でもみんな日銀が潰れることはないと思っているからこそ、日銀に対し利子も取らずに貸し付けているのです。それでも貸し付けの手間賃代は日銀から戴いても良いはずですが、手間賃の代わりに通貨としての利便性というサービスを受けているので、それが手間賃と相殺されている構図です。

通貨としての利便性とは、物々交換をしなくてもみんなが共通の価値として認めている円の単位で、ものやサービスの売買ができることです。インターネットで個人が自分の持ち物の売買が自由に行えるメルカリのサービスで、モノとモノとの交換しか認めなかったら、殆ど売買が成立しないことをイメージすれば理解いただけるでしょう。

2. 仮想通貨

このように皆さんが当たり前に使っている円のお札は、信用と利便性の上

人々の間に広がると、仮想通貨は当初の発行額を一定量に制限するため、巨額の場合は難しいものの、それを除いた相当数の送金は銀行を通さないのが当たり前になる可能性も否定できません。

やチケットショップで取り引きされるように、仮想通貨が大幅な値上がりをするようになるのです。明治のコインは表面の通貨としての価値と、チケットショップでの取引価値とは別立てになります。仮想通貨はまさしくコンピュータの中での仮想のコインなので、どのような単位にも分割できます。このため値上がり価値分総てを決済に使うこともできるのです。

仮想通貨の場合は発行量が制限される結果、上記の明治金貨と同じようにチケットショップ的な取引になるため、どの窓口で購入するかでそのチケットショップの仕入れ値段によって売りの値段に相当の差がでます。

3. 仮想通貨の革新性

ここからが今回の本題です。仮想通貨は、発行量が決められる以上、特定の目的を持ったお金のやりとりを使うことが適しています。そうすると特定の目的のためにお金を欲しい人とお金を貸したい人とを直で結ぶようになるので、手間賃コストも抑えられることになり。ネットの世界ですから、相対の直の取引が国を超えて地球の裏側と行われてもコストは同じなので、そうした送金が極めて安くできることになり。

信用というものはみんなの認識によって生まれるものですから、何年か先に仮想通貨への信用認識の共有が

に成り立っているものです。最近は何が増えているクレジットカードも、同じように信用と利便性を仲介しているサービスです。クレジットカードは、購入した客がちゃんと決済してくれるかどうかの信用をカード会社が肩代わりする代わりに、お店から決済までの期間の金利と手間賃とを戴くシステムです。

国の許可を貰った金融機関とか、カード会社のようにそれに近い信用力のある組織が、お金の需要ニーズと供給ニーズとを結び、そこでそれなりの手間賃を取るの、カードに代表されるような今までの決済システムでした。

そこに新たなシステムが登場しました。そのシステムに入った人全員で監視し、絶対に不正が行われないという信用力で、相対でお金の需要ニーズと供給ニーズとを繋ぐ決済システムを作り出したのが仮想通貨、代表的なものの通称でビットコインなのです。これだけでは信用力が充分でないのです、仮想通貨の発行に際しては、発行量を予め決めます。発行元が安易に発行量を増やして価値が下がるような信用不安を起さないために、つまり信用を維持するために追加の増量発行が原則ないのです。だから明治時代に発行された金貨で希少かつ人気のあるものが通貨としては1円でしたか通用しないのに、何万倍もの価値がついてコイン商

で生み出す価値が高く評価される事業が急速に世界に拡大し、それぞれの仮想通貨チェーンの価値が大幅に上昇するかも知れません。

仮想通貨というまだまだ一般的には投資の対象として見られている場合が多いと思います。視点を変えてここまです説明したような可能性を想像すると面白いと私は考えています。大げさでなく大きな社会変革のスタート地点に私達はいるのだと思うと何故かワクワクしてきます。皆さんは如何ですか。

濱田 敏彰

Toshiaki Hamada

1955年大阪市福島生まれの東京日本橋育ち。東京大学法学部を卒業し、大蔵省(現財務省)に入省。政府経済見通しの作成に始まり、銀行検査官、税務署長、大阪税関長、大臣官房審議官、他省への出向ではジェトロコペンハーゲン事務所長、地方分権推進委員会事務局参事官、東日本大震災の際には消防庁審議官を経験。2015年税務大学校長を務めに退官し、現在は経済評論家、関西大学客員教授。

